



Title	関西共通語化の現状：大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって
Author(s)	中井, 精一
Citation	阪大日本語研究. 1992, 4, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関西共通語化の現状

——大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって——

Kansai Dialect as a Regional Standard

——The Diffusion of Osaka-type Treatment Expressions——

中 井 精 一

NAKAI Seiichi

キーワード：都市化，大阪方言，「ハル」・「ヤル」，地域共通語化

1. はじめに

近年，社会構造の変容と言語変化の関わりについて，様々な側面から検討が加えられ，両者の間に密接な繋がりのあることが指摘されている。特に大都市に隣接する地域にあってはその傾向が顕著である。同様のことは，関西中央部¹⁾においても考えられ，これまで大部分の人が，居住地及びその周辺を生活圏としていたため，日常的に他地域の人々と交流することはあまり多くなく，地域社会で用いられる言語も安定した運用がなされていた。しかし，昭和40年頃を画期に急激な人口移動や生活行動圏の拡大がみられ，この地域の言葉を取り巻く環境も大きく変わってきた。

言語を構成する多くの部門にあって，もっともこのような外的な事象の影響を受ける項目の一つに待遇表現法が挙げられると考えられる。待遇表現は，上下，親疎を基準に，地域社会の規範に根ざした話し手の社会行動が如実に反映されるからである。【柴田 1985】

近畿方言における待遇表現の研究は，記述的な方法【模垣1946 前田1949】により開始され，研究が本格化したのは西宮（1959）以降である。西宮は，京都一大阪の平坦部に隣接する奈良県を対象に調査され，文末詞

- ・補助動詞から見たこの地域の待遇表現形式の地理的な広がり並びにその運用詳細について報告されている。

西宮以後、この分野の研究は長らく停滞していたが、滋賀県を中心に綿密なフィールドワークを行った宮治（1987）を契機として、その後いくつかの地域で調査・研究がすすめられているが、未だ十分と言える状況に至ってはいない。

ここでは、近畿方言の特質の一つに挙げられている第三者に対する待遇表現を中心テーマとして、関西中央部で筆者が行ったフィールドワークの結果を報告するものである。

2. これまでの状況

近畿方言の待遇表現で用いられる補助動詞は、ハル・ヤハルをはじめ、ル・ラル、イス・ヤイス、タルなど多くの形式が存在するが、今回、筆者が焦点をあてる待遇表現上の補助動詞は、ハル・ヤハル並びに大阪方言で用いられるヤルである。そこで、まずこの形式に関するこれまでの状況を概観したい。

《大阪型》

上向きの待遇を示す補助動詞にハル・ヤハルがある。大阪では動詞の連用形にハルの形で接続し、現在はヤハルの使用は認められない。（動詞との接続においてハルに統合される=ハル統合現象）また、五段動詞はア段接続とイ段接続に分かれるがイ段接続の方がより待遇度が高い。加えて、進行形に関してもテハルとタハルの併用があるがテハルの方が待遇度が高い。ただし、現在ではほとんどの人がイ段接続並びにテハル接続となっている。ハル・ヤハルより待遇度が下がる補助動詞としてヤルがあり、第三者的待遇にのみ用いる。主に女性が用い、男性は余り使用しない。

《京都型》

上向きの待遇を示す補助動詞にハル・ヤハルがある。京都では、五段動詞にはハルでア段に接続し、その他の動詞にはヤハルの形をとる。また、進行形はタハルで接続する。

京都には、大阪で用いられるヤル及び、それに代わる補助動詞は使われない。

《奈良盆地型》

上向きの待遇を示す補助動詞にハル・ヤハルがある。奈良盆地では京都と同様に動詞の連用形に接続し、五段動詞にはハルで、その他の動詞にはヤハルの形をとる。また、進行形はタハルで接続する。

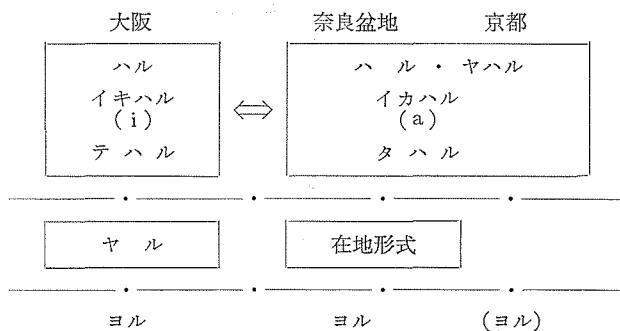
奈良盆地では、従来、大阪で用いられるヤルの使用は認められなかった。これとは別にハル・ヤハルより待遇度の下がる補助動詞としては、イス・ヤイス、インス・ヤインス、タル、ル・ラル、ヤルなどがあって、それぞれが独自の分布領域をもって存在する。

なお、ここで言う大阪、京都というのは、それぞれの中心部にあたる地域を意味する。

(ハル敬語の型式)

	大 阪 型	奈良盆地型	京 都 型
行 く	イキハル（イカハル）	イカハル	イカハル
来 る	キハル（キャハル）	キャハル	キャハル
す る	シハル（シャハル）	シャハル	シャハル
買っている	コーテハル（コータハル）	コータハル	コータハル

(関西中央部に於ける待遇表現概略図)



また、筆者が、1985年から89年にかけて行った老年層に対する調査結果から運用面を見ると、

《対 者》

	京都市 上京区	大阪市 天王寺区	神戸市 須磨区	岸和田市 並 松	奈良市 下山町	桜井市 三輪町	当麻町 竹ノ内	高取町 清水谷
目上	コラレル キヤハル	コラレル キハル	コラレル	コラレル クル	コラレル キヤハル	コラレル キヤハル	コラレル キャール	コラレル キヤハル
同等	キヤハル クル	キハル クル	クル	クル	キヤハル	クル	クル	クル
目下	クル	クル	クル	クル	クル	クル	クル	クル

《第三者》

	京都市 上京区	大阪市 天王寺区	神戸市 須磨区	岸和田市 並 松	奈良市 下山町	桜井市 三輪町	当麻町 竹ノ内	高取町 清水谷
目上	キヤハル	キハル	クル	クル (キハル)	キヤハル	キヤハル	キャール	キヤハル
同等	キヤハル クル	(キヤル) クル	クル	クル クル	キラル クル	キャル クル	キャイス クル	キタル クル
目下	クル キヨル	クル キヨル	クル	クル	クル コル	クル キヨル	クル キヨル	クル キヨル

a. ハルを受容していない岸和田・神戸を除き近畿地方中央部では、上向きの待遇表現にハルを用いる。ただし、岸和田のインフォーマントは、家族などを話し相手にしている場合はハルを使用しないが、公的な場面ではハルを用いると回答した。

b. ヨルを受容していない神戸を除き近畿地方中央部では、下向きの待遇表現にヨル（オル）を用いる²¹⁾。なお、このヨルはアスペクトを表示するヨルではない。

c. 同等レベルの第三者に対しては、地域ごとに特徴ある補助動詞が存在し、それらは独自の分布領域をもつ。ただし、京都・岸和田・神戸には該当する語形がない。

d. 第三者に用いる諸語形は、ハルを除き対者待遇には使用できない。

3. 調査について

今回（1990～1991）の調査も、意図する待遇表現形式が示されるよう場

面・対象・内容・心理状態などに配慮して条件を設定した³⁾。なお、調査Bは、調査Aの結果に基づき、聞き手に変化を持たせた場合を加え、より運用の詳細をつかむべくおこなった調査である。

1. 調査地点——表1に示した76地点である。(調査Bは☆の14地点)
2. インフォーマント——調査地点で言語形成期を過ごした18歳以上30歳未満の女性である。

3. 調査項目

調査A

家のなかで、和やかに話している場面を想像してください。そのとき以下に示す者が来ることを告げる折、「～が来る」の部分をどのようにいいますか。

- 1 近所の目上の人 2 友人 3 近所の目下の人

調査B

1. あなたが普段使う言葉で、「～が来る」と言うとき、最もていねいな言い方からもっともぞんざいな言い方まで全て教えて下さい。

2. 家のなかで、和やかに話している場面を想像してください。そのとき以下に示す者が来ることを告げる折、「～が来る」の部分をどのように言いますか。

- 1 出身校の校長先生 2 近所の目上の人 3 父親
4 友人 5 近所の目下の人 6 犬などの動物

3. 学校の友人や職場の同僚と和やかに話している場面を想像してください。そのとき以下に示す者が来ることを告げる折、「～が来る」の部分をどのように言いますか。

- 1 出身校の校長先生 2 近所の目上の人 3 父親
4 友人 5 近所の目下の人 6 犬などの動物

4. 道を歩いていたら向こうから以下に示す人がやってきました。その時、相手にむかって、「あとで来るのか」と尋ねるとします。「～来る」のところをどのように言いますか。

- 1 出身校の校長先生 2 近所の目上の人 3 父親

4 友人 5 近所の目下の人 6 犬などの動物

5. 以下の動詞に「ハル、 ヤハル」を接続させてください。

1 行く 2 居る 3 する 4 買っている

調査地點

大坂市天王寺区御堂町	門真市岸和田町	龜崎市馬路町御倉	奈良市庄園町
大阪市住吉区設置町	吹田市岸部中	櫻井郡田辺町三八木	奈良市下山町
大阪市守野設置中	高槻市南苔川町	相樂郡和東町植田	奈良市百葉園
大阪市中央区桜川	豊中市曾根西町	相樂郡南山城村水郷	大和郡山市御町
大阪市東成区六今里	南河内郡太子町太子	相樂郡木津町梅谷	大和郡山市小泉町
大阪市淀川区十三本町	南河内郡美原町黒山	相樂郡精華町乾谷	天理市前裁町
大阪市東住吉区北田辺			生駒市辻町
大阪市鶴見区北津北			桜井市三輪町
大阪市此花区西九条	神戸市灘区城内通り	大津市上田上桐生町	樋原市島屋町
東大阪市上小阪	神戸市須磨区養老	菖蒲市東矢食	樋原市曾我町
東大阪市荒川町	尼崎市戶ノ内町	守山市守山	大和高田市池田
東大阪市加納	西宮市池田町	野洲市野洲町小篠原	御所市伏見
堺市向陵中町		栗太郡栗東町六地處	五條市須恵
堺市浜寺船尾西町		甲賀郡水口町新町	五條市二見
岸和田市並松町	京都市上京区後御油町	甲賀郡守山町市原	磯城郡川西町結崎
八尾市立恩地中町	京都市下京区後御油町		北葛城郡香芝町下田
大東市大野	京都市山科区朝子桑若林町		北葛城郡当麻町竹内
羽曳野市葵田	京都市伏見区石田大山町	宇治市	北葛城郡新庄村北花内
富田林市敷志	京都市西京区桂春日町	守口市	北葛城郡河合町長榮
枚方市藤坂西町	長岡京市勝竜寺	和歌山市西高松	高市郡高取町清水谷
交野市星田	宇治市伊勢田	橋本市西田町	宇陀郡大字陀田春日
守口市星都通り	城陽市寺田今堀		吉野郡大淀町土田



図1 調査対象地域及びその周辺市町村

4. 調査結果

4-1 調査Aについて（話し相手は家族）

関西中央部の老年層の調査では一般に、「ハル・ヤハル／ヤル、（ル・ラル、イス・ヤイス、タル、ヤル）、（クル）／ヨル（クル）」の体系が認められるが、今回の若年層女性の調査では老年層（特に男性が多用）が目下に対してもちいるヨルについて、ほとんど回答が得られず、目下への回答の大半が同等に使用する語形で行われた。そこで、図2は1（キハル・キヤル）、2（キハル・クル）、3（キヤハル・キヤル）、4（キヤハル・クル）、5（キヤハル・中間内地語）、6（在地語・クル）、7（クル）の分類をもとに地図化したものである。

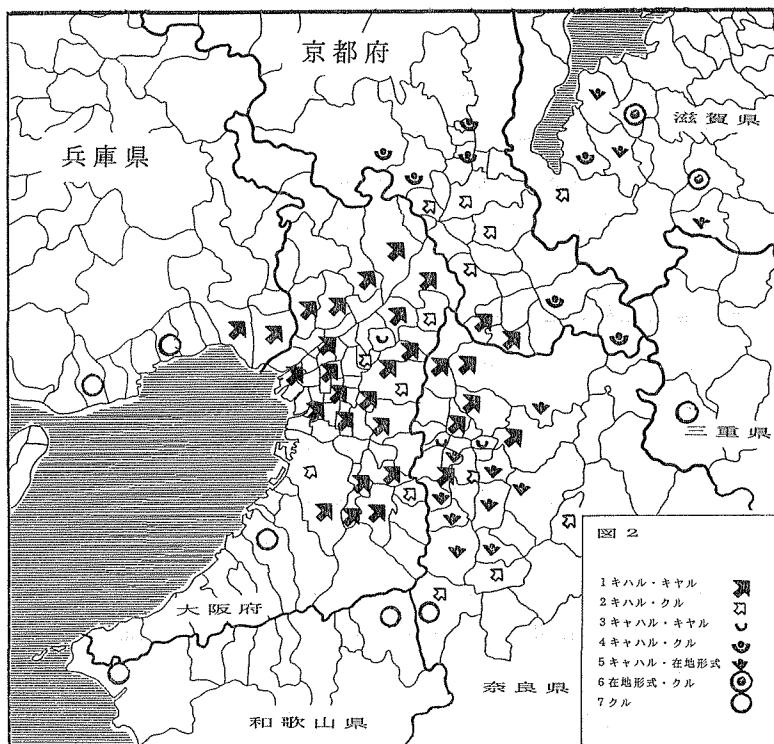


図2

1型は、 ハル・ヤハルがハルで統合し、 その下位をヤルをもって待遇する形式であり、 2型は、 同じくハル・ヤハルがハルで統合し、 その下位を待遇する補助動詞が存在しない形式である。また、 3型は、 従来からの接続をするハル・ヤハルに大阪型のヤルがその下位を待遇する形式で、 4型は、 従来からの接続をするハル・ヤハルのみで、 その下位を待遇する補助動詞が存在しない形式である。次に5型は、 3・4型と同じハル・ヤハルの下位にそれぞれの地域に独自の分布領域を持つ補助動詞が存在する形式で、 6型はハル・ヤハルを使用せずそれぞれの地域に独自の分布領域を持つ在地の補助動詞で上位を待遇する。そして、 最後に7型は、 関西中央部で用いられる待遇表現形式をもっていない型ということである。1(キハル・キヤル)型は大阪市内を中心に、 西は西宮、 南は堺・富田林、 東は奈良盆地北部にまで分布領域を拡大している。また、 1型の亜流である2(キハルクル)型は、 1型の周辺及びその東側にまとまった分布をしている。3(キヤハル・キヤル)型は、 最も関西中央部の固有の体系に近い型と思われる5(キヤハル・中間在地語)型と1型との接触地域に見られる形式である。4(キヤハル・クル)型は京都市内や南山城地域に存在する。なお、 この調査の回答から判断して、 ハルやヤル等の体系を持たない7(クル)型は周縁部にひろがりをもつようである。

4-2 調査結果Bについて

1. 大阪市の資料から、 老年層とほぼおなじ第三者待遇のシステム「(共通語形)／ハル／(統合現象・イ段・テハル)=(新型)／ヤル(大阪型)／(クル)」が定着し、 場面が家の中であれ、 学校や職場であっても変化はない。

下向きのヨルは理解語としては存在するが、 消滅の方向にあることがうかがえる。

2. 岸和田市の資料から、 大阪市内と同じ統合されたハルを知識としてはもっているが、 具体的な使用場面での回答がないため、 定着しているとは断定できない。

3. 枚方市の資料から、 大阪市内と同じ待遇表現形式をもっていることがわかる。

調査結果 B
1について

大阪市東成区	1イラッシャル	2コラレル	3キハル	4キハル	5クル	6キヨル
岸和田市並松	1ラッシャル	2コラレル	3キハル	4クル	5ヨル	*
枚方市藤坂西	1ラッシャル	2オヨニコタツ	3コラレタ	4キハル	5ル	
東大阪市加納	1イラッシャル	2コラレル	3キハル	4クル	5オル	
神戸市須磨区	1ラリル	2イラッシャル	3キハル	4クル		
京都市上京区	1ラリル	2イラッシャル	3キハル、キハル	4クル	6キヨル	
長岡京市勝竜寺	1イラッシャル	2コラレル	3キハル	4クル		
田辺町三八木	1ラリタ	2キハル、キハル		4クル	5キヨル	
甲南町市原	1ラリル	2キハル	3キハル	4クル	5キヨル	
奈良市百楽園	1イラッシャル	2コラレル	3キハル	4キハル、クル		
奈良市下山町	1ラッシャル、コラル	2コラレル	3キハル、キハル	5キハル、キハル	7クル	8キヨル
桜井市三輪町	1ラリル	2オニコタツ	3キハル、キハル	5キハル、キハル	7クル	8キヨル
当麻町竹ノ内	1イラッシャル	2コラレル	3キハル、キハル	5キハル、キハス	7クル	8キヨル
高取町清水谷	1コラレル	2キハル	3キハル、キハル	5キハル、キハル	7クル	8キヨル

◀調査結果2、3、4については回答を記号で表すものとする。▶
☆キハル、★キヤハル、○キヤル、△キラル、□キアイス、△コラレル、▲イラッシャル、◎キヨル、※クル
2について（話し相手は家族）

	大阪市	岸和田	牧方市	東大阪	神戸市	京都市	長岡京	田辺町	甲南町	鶴齋村	奈良市	桜井市	当麻町	高取町
1校長先生	☆	※	☆	☆	※	★	☆	★	★	☆	★	★	△*	★
2近所の目上	☆	※	☆	☆	☆	※	★	☆	★	★	★	★	★	●
3父親	※	※	※	※	※	※	※	※	◆	※	※	※	※	※
4友人	○	※	○	※	※	※	※	※	○	○	○	○	●	□
5近所の目下	○	※	○	○	※	※	※	○	○	○	○	○	○	※
6犬など	獣	※	※	※	※	■	※	⑥	※	※	※	※	■	○

3について（話し相手は学校や職場の友人）

	大阪市	岸和田	牧方市	東大阪	神戸市	京都市	長岡京	田辺町	甲南町	鶴齋村	奈良市	桜井市	当麻町	高取町
1校長先生	☆	※	☆	△	★	☆	△	★	★	☆	★	★	△*	★
2近所の目上	☆	※	☆	☆	■	※	★	☆	★	★	★	★	★	※
3父親	※	※	※	※	※	※	※	※	◆	※	※	※	※	※
4友人	○	※	○	※	※	※	※	※	○	◆	○	○	○	○
5近所の目下	○	※	○	○	※	※	※	※	○	○	○	○	○	○
6犬など	※	※	※	※	※	■	※	⑥	※	※	※	※	※	※

4について（直接相手に対する）

	大阪市	岸和田	牧方市	東大阪	神戸市	京都市	長岡京	田辺町	甲南町	鶴齋村	奈良市	桜井市	当麻町	高取町
1校長先生	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
2近所の目上	☆	※	☆	☆	☆	■	★	☆	★	☆	★	★	★	★
3父親	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
4友人	※	※	※	※	※	※	※	※	○	○	○	○	○	○
5近所の目下	※	※	※	※	※	■	※	⑥	※	※	※	※	※	※

ただし、校長先生と近所の目上の人に対しては、デス、マスを伴う。

5について（ハハレとの接続形）

	大阪市	岸和田	牧方市	東大阪	神戸市	京都市	長岡京	田辺町	甲南町	鶴齋村	奈良市	桜井市	当麻町	高取町
1来る	☆	☆	☆	☆	☆	★	☆	☆	⑥	☆	☆	☆	⑥	⑥
2居る	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	⑥	☆	☆	☆	⑥	⑥
3する	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	⑥	☆	☆	☆	⑥	⑥
4行く	☆	♪	☆	☆	★	♪	☆	☆	★	☆	☆	★	☆	★
5買っている	☆	♪	☆	★	♪	★	☆	★	★	☆	★	★	★	★

記号について

[キハル、イハル、シハル、イキハル、コウテハル] - ☆
[キヤハル、ヤハル、シヤハル、イカハル、コウタハル] - ★
[両者の併用] - ○

[無回答] - ♪

4. 東大阪市の資料から、ハル・ヤハルに関してはハルで統合していく大阪市内と同じ状況がうかがえるが、五段動詞との接続や進行形での接続が大阪の新しい型ではない。また、ヤルの使用がみられない。

5. 神戸市の資料から、老年層が第三者待遇の体系を持っていなかった

のに対し今回調査した若年層では、統合化したハルの回答が見られた。しかし、具体的な運用については“ゆれ”を示すことから、岸和田と同様、完全な定着にはいましばらく時間が必要かもしれない⁴⁾。

6. 京都市の資料から、若年層女性の回答は老年層とほぼ同じで、ハル・ヤハルの接続は旧来通り、また、大阪で用いられるヤルの使用も認められなかった。しかし、インフォーマントの情報では、この地域の若い女性の中にはすでに、ヤルを使用する者も少数ながら存在することであり、項目1に示された実際には使用の認められない統合化したハルの回答が示されていることと共に、京都市は今後の展開が注目される地域のひとつであろう。

7. 長岡京市の資料から、大阪を中心に分布する（新型）ハルの形式を持つ。ただし、京都と同じように、ハルに続く待遇をするヤルは認められなかった。

8. 田辺町の資料から、旧来のハルと統合化したハルの両方の回答が得られたが、実際の運用については統合化したハルの使用はみとめられなかった（ハルについては京都型）。ただし、ここで示されたヤルについては大阪の影響を受けて使用されているものと考えられる。

9. 甲南町の資料から、これまでのこの地域の運用については宮治弘明氏の報告によるところが大である。それを参考にすると、今回の調査結果は、老年層と殆ど変わらず、旧来のハル・ヤハルが上にあり、その下を在地のヤルが待遇するシステムが若年層でも確認された。

10. 奈良市百楽園（奈良市西部の都市型住宅地）⁵⁾
大阪市の回答「ハル（新型）／ヤル（大阪型）／（クル）」とほぼ同じスタイルである。また、二つの場面による相違もみられない。

11. 奈良市

場面が家の中などの折は、老年層同様旧来の「ハル・ヤハル（在地型・京都型）／中間ラル（在地型）／（クル）／ヨル（在地型）」となり、場面が学校や職場になると、「ハル（在地型・京都型）／中間ヤル（大阪型）／（クル）」と、中間部分が変化し下層のヨルが消滅する。

項目1・5より、ハルについては、調査Aでは確認できなかった統合化したハルと旧来のハル・ヤハルの両形式が確認される。両形式間で、動作の主体に対する待遇度と言う点ではほとんど違いは認められない、しかし、両形式のいずれがより丁寧な形式であるかという質問には、統合化したハルが示された。また、ヤルについては在地型の補助動詞よりもフォーマルな場面での使用が認められた。以上より、この調査地点もやがては現在の大坂の状況に進行するものと考えられる。

12. 桜井市

場面が家の中などの折は、老年層同様「ハル(在地型・京都型)／中間ヤル(在地型)／(クル)／ヨル(在地型)」となり、場面が学校や職場になると、「ハル(在地型・京都型)／中間ヤル(大阪型)／(クル)」と、中間部分が変化し下層のヨルが消滅する。また、項目1・5より、奈良市と同様のことが考えられる。なお、中間のヤルが在地型であるのか、もしくは新しい大阪型であるのかは、在地型が拗音化したり形を崩し～ルで接続するのに比べ大阪型は変化しないこと、そして「来る」=キヤルを例にとると、在地型はキヤル「●●●」に対して、大阪型「●〇〇」となりアクセントがことなることから区別できる。

13. 当麻町

場面が家の中などの折は、老年層同様「ハル(在地型・京都型)／中間イス・ヤイス(在地型)／(クル)／ヨル(在地型)」となり、場面が学校や職場になると、ハル(在地型・京都型)／中間ヤル(大阪型)／(クル)と、中間部分が変化し下層のヨルが消滅する。また、調査Aの回答からは見られなかつたが、調査B-3の校長先生への統合化したハルの形式での回答などから、この地でも奈良市と同じような状況であることが考えられる。

14. 高取町

場面が家の中などの折は、老年層同様「ハル(在地型・京都型)／中間タル(在地型)／(クル)／ヨル(在地型)」となり、場面が学校や職場になると、「ハル(在地型・京都型)／中間ヤル(大阪型)／(クル)」と中間部分が変化する。しかし、奈良盆地の他の地点の回答と異なり、在地のタルと大阪の

ヤルとの間には微妙な差異があるようである。その他の状況については、奈良盆地の他の地点と同様のことが考えられる。

5. ま　と　め

ここでは、調査結果A・Bから補助動詞ハルとヤルに注目して、待遇表現形式からみた関西共通語化について考え、併せて近畿方言における待遇表現の将来に言及したく思う。

まず、ハルについては以下のように考えられる。

1 ハルの変化に関しては、従来五段動詞がハル、それ以外の動詞がヤハルで接続していたが、全ての動詞の接続においてハルで統合される。この動きは大阪市内ではすでに昭和20年代に始まり、現在は大阪府全域・奈良盆地・京都府西部などで進行している。ただしこの変化については、かつての大坂市内で進んだようなハル・ヤハルの内的変化によるものと、大阪市の影響をうけて進行した外的変化による要因との両方が考えられるであろう（このような補助動詞の統合現象は可能表現や打消表現においても観察される現象で、詳細なデータをもとに各表現法との比較検討が必要であろう）。

2 次に大阪市を中心に広がる五段動詞接続時のイ段接続および進行形のテハルについては、ハル統合化の進行とは異なり、周辺地域への波及はあまり進んでいない。ハルへの統合現象はこれまでヤハルで接続していた動詞を五段動詞同様の接続に変化させるもので、いわゆる類推であり、その変化は既成の形式の中で比較的容易にすすめられる。一方イ段接続や進行形のテハルは、既成の形式を放棄し、その上で新たな形式を受容するといった大がかりな変化となるため、ハル統合化のながれとは異なる結果になったものと思われる。

ヤルについて

1 図2の言語地図からは、大阪府と奈良盆地北部の一部に分布が確認されるのみであったが、資料Bから地図では現われていない地点であっても、場面を変えることで現われる事がわかった。したがって実際の分布は、

奈良盆地を含む広範な地域となるであろう。

2 また、ヤルの受容にあたっては、ハルの下に地域独自の素材待遇語を持つ地域（奈良盆地など）すなわち、「ハル／独自の素材待遇語／ヨル（クル）」の枠組をすでにもっている地域は、これまでの待遇表現の枠組を変化させることなく、補助動詞の部分だけの変化で済むため、この枠組を持たない地域と受容に差異が認められる（ただし、直接大阪の影響を受けにくい滋賀はこれには含まれない）。

以上今回の調査で明らかになった近畿方言の待遇表現についてまとめる
と、これまで言われてきた第三者への待遇表現での素材待遇語の偏りとい
った特質は、若年層女性の調査結果から今後も維持されるものと結論づけ

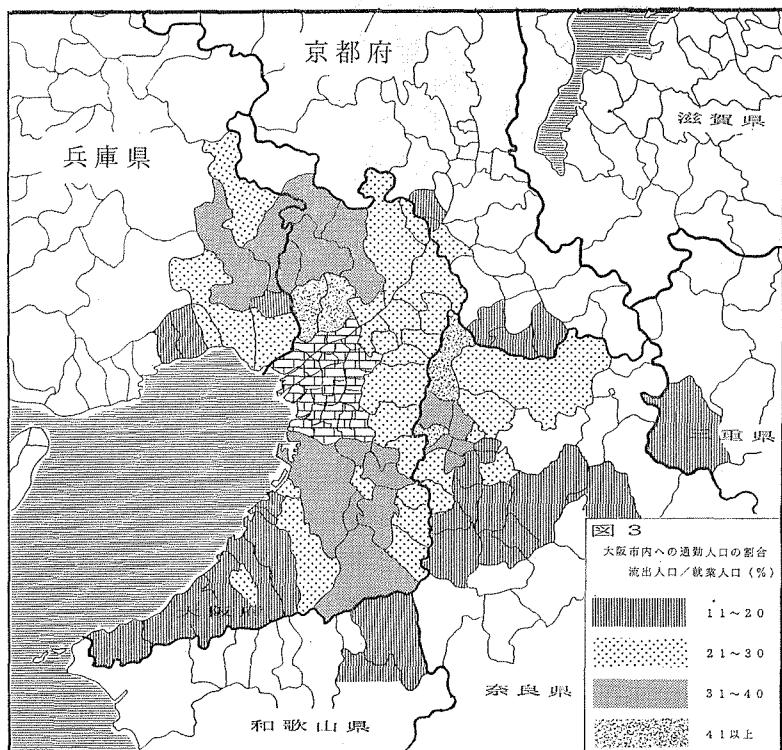


図3

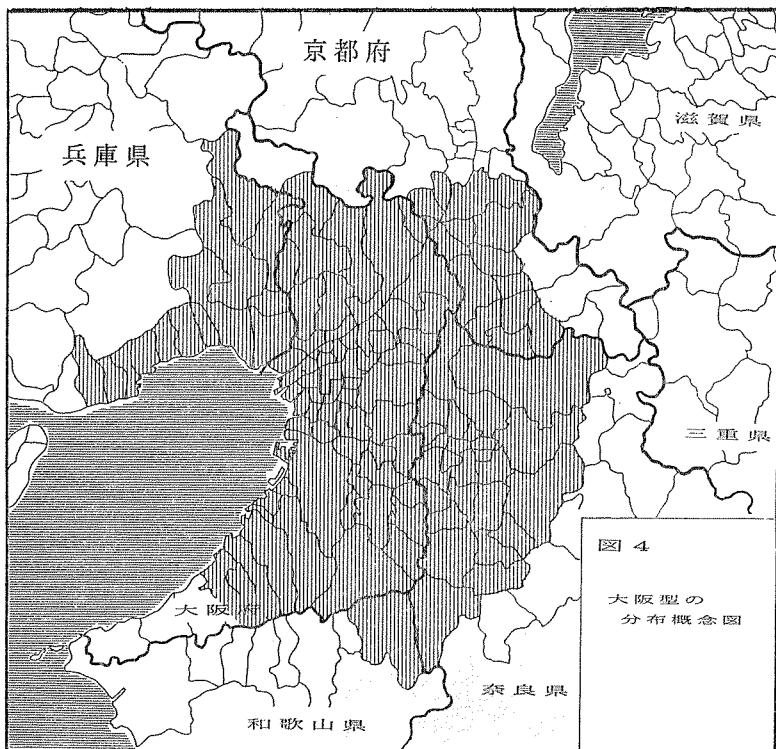


図4

られる。しかし、資料B（父親）からこれまで近畿方言の特徴の一つに數えあげられていた身内尊敬用法の例はほとんど認められず、すでに相対敬語的な用法にすすんでいることが判明した⁶⁾。

近畿地方中央部では、言語それ自体の起こす内的な変化と、通勤圏の拡大（図3）、地域社会の変質等の外的影響により周辺地域と共に通した形式、すなわち大阪型待遇表現形式〔ハル（統合現象・イ段接続・進行形テ）、ヤル〕の分布領域（図4）がひろがってきてている。この形式の受容に関しては、各地域に独自に存在する言語環境に影響され、全ての地域が一様に、また、急速に進行するとは考えられず、今しばらくは一進一退を続けるかもしれない。しかしながら、やがては関西中央部で勢力をもつ大阪型に漸次変化し、統一されていくものと考えられる。

注

- 1) ここでいう関西中央部とは京都・大阪を中心とした近畿地方平坦部を意味する。
- 2) 同等以下を待遇する「ヨル」は、地域によって、その接続する動詞と関係により「動詞+オル」の形をとるばかりがある。
- 3) 老年層におこなってきた条件と同様に、リラックスした心理状態で、聞き手はウチの人間であり、対象も上下の軸が揺らぐ事のないようにして、単なる伝達にならないよう感情を込める（ただし極端なプラス・マイナスの感情をいれない）よう配慮した。
- 4) この調査は、特に補助動詞「ハル・ヤハル」及び「ヤル」に焦点をあてて行ったため、この地域の待遇表現として用いられている「テヤ」敬語については、回答がえられなかつた。
- 5) この地域の住民の大半は、何らかの形で“大阪”と繋がりを持つ、いわゆる奈良府民である。
- 6) これまでの研究で、近畿方言の特色の一つにあげられてきた「身内敬語」の存在を含め、詳細な検討が必要であろう。

参考文献

- 飯豊毅一 1987 「对外身内待遇表現の調査」(『学苑・日本文学紀要』)
- 井上史雄 1989 『言葉づかい新風景』(秋山書店)
- 煤垣 実 1946 『京言葉』(高桐書院)
- 岸江信介 1991 「京都・大阪のことばの争い」(名古屋方言研究会第79回例会発表資料)
- 真田信治 1990 『地域言語の社会言語学的研究』(和泉書院)
- 柴田 武 1985 『都市の敬語の社会言語学的研究1, 2 昭和56年度札幌における敬語調査報告』
- 渋谷勝己 1986 「可能表現発展・素描」(『日本学報』5)
- 中井精一 1989 「奈良盆地中南部における待遇表現形式の分布について」(『地域言語』1)
- 西宮一民 1959 「奈良県方言の待遇表現について」(『国語学』36)
- 前田 勇 1949 『大阪弁の研究』(朝日新聞社)
- 宮治弘明 1987 「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」(『国語学』151)

付 記

本稿をなすに当たり、面接調査に心良く協力していただき、資料等を提供して下さった方々に対し感謝申し上げたい。また本稿は、第52回日本方言研究会(1991年5月:甲南女子大学)において口頭発表したものを加筆修正したもので

ある。当日、会場で種々貴重なご助言を賜った先生方に心からお礼申し上げる。

(天理大学附属天理参考館学芸員)